

霞

—2013年度春季展示室だより—

土浦市立博物館

平成25年5月14日発行(通巻第23号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(23)

古写真「真鍋小学校」



明治40(1907)年に建てられた真鍋小学校の校舎。茨城県指定文化財(天然記念物)の「真鍋の桜」はこの土手に植えられたものです。数回にわたる校舎拡張により、桜は現在小学校のグラウンド中央に位置しています。

【情報ライブラリー検索キーワード「真鍋小学校」】

目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(23)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【館長講座及び各展示と催し物等】
- 古代の工具・刀子(古代)・・・2
- 法雲寺境内図(中世)・・・3
- 土浦城模型を楽しむ—後編—(近世)・・・4
- 江戸時代の日記にみる春の行事(近世)・・・5
- 真鍋小学校校舎の変遷(近代)・・・6
- 市史編さんだより・・・7
- 霞短信「博物館と共に、地域に根差して」・・・8
- コラム(23)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★ 5月19日(日)・6月16日(日)

両日とも午後2時~(1時間30分程度) 会場:博物館視聴覚ホール

「世界遺産を目指して」と題し、筑波山麓と霞ヶ浦周辺の遺跡についてお話しします。

★★はたおり体験★★ 6/22、6/29、7/6、7/13、7/20、7/27(いずれも土曜日)

さき織り(裂いた古布をよこ糸に使う織り方)を体験します。 **※要予約です。詳細はお問い合わせください。**

★★土浦ミュージアムセミナー2013「新治地域の歴史と文化」★★

土浦地域の歴史について、学芸員が研究成果をお話しします。

- 6月23日(日) 関口 満 「霞ヶ浦最奥部の縄文貝塚」
- 6月30日(日) 塩谷 修 「常総地域における古墳と儀礼」
- 7月7日(日) 黒澤 春彦 「新治窯跡群の概要」
- 7月14日(日) 比毛 君男 「東城寺経塚の諸問題」

時 間:各回午前10時~11時30分まで
 会 場:考古資料館 体験学習室
 受講料:各回50円(資料代)
 定 員:各回50人(当日受付)
 お問い合わせ:上高津貝塚ふるさと歴史の広場
 (029-826-7111)

★★文化財愛護の会写真展★★ 5月30日(木)~6月22日(土)

★★拓本同好会作品展★★ 6月26日(水)~7月15日(月)

★無料開館のお知らせ★ 5月18日(土)国際博物館の日

★春季展示は5月14日(火)~6月26日(水)までです★ ※休館日は毎週月曜日です



博物館マスコット
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

とうす 古代の工具・刀子

— 役人の必需品として —

刀子は、小刀のことで、武器としてよりおもに日常の工具として用いられました。中国ではすでに殷代から青銅製の刀子が見られますが、日本では鉄製の刀子が一般的で、弥生時代に始まり、3・4世紀の古墳から副葬品として多く出土するようになります。木製の柄のほか、鹿角製で幾何学的な直弧紋をあしらったものもあり、鞆も獣の革で袋状につくったもの、木鞆を革で覆ったものなどがあり、つり下げて使っていたとみられています。

奈良時代の都、平城宮には役人たちが政務を行うための仕事場があり、文書作りのための紙・筆・墨・硯・水差などの文房具が並んでいました。奈良時代の文書は、紙とともに細長い木の札に文字を書いた木簡も使われました。木簡は、発掘調査により全国でかなりの数が見つっています。文書の書かれた木簡によって、中央と地方の間の政治のやりとりが具体的に分かります。この木簡の文字を消し、再利用するために、木簡の表面を削る道具として刀子が必要でした。このことから当時の役人を「刀筆の吏」と呼ぶこともあるそうです。なお、刀子は木簡を削ったり、紙を切ったりという文房具として使用されたほか、組紐などにつないで腰帯につるす佩飾品として、柄や鞆などの外装に凝った装飾が施されたものもみられます。奈良東大寺の正倉院宝物にみられるように、製作に際しては、水牛や犀の角などの珍材が盛んに用いられました。

今回紹介する刀子は、市内で発掘された平安時代初期の竪穴住居の跡から発見されました。全長 20.7 cm、刃長 12.5 cm のやや大型の刀子で、鉄製の本体のみが出土しています。刃部にわずかに有機質の痕跡が残されていますが、鞆や柄などの装具はほとんど腐朽してしまい判然としません。

刀子が出土した石橋北遺跡（土浦市田村・沖宿遺跡群）は、霞ヶ浦土浦入りに面する台地上にあった奈良～平安時代（8～10世紀）の集落跡で、倉庫などに使われた掘立柱建物跡が50数棟も発見されています。この地が古代の茨城郡大津郷（津は港を意味する）に相当することから、内海の港に附設された物資の集積場所ではなかったかと考えられています。倉庫であれば、荷札などに多くの木簡が使われていたことが想像され、刀子は倉庫を管理する役人たちの必需品だったとも考えられます。（塩谷 修）



石橋北遺跡出土の鉄製刀子（両面）（当館所蔵）

6/22（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも古代コーナーに展示）

- 鉄製鋤先（土浦市尻替遺跡）
- 鉄製穂摘具（土浦市石橋北遺跡）
- 鉄製鎌（土浦市石橋北遺跡）



せっしょう

法雲寺境内図 (雪蕉筆)

—在りし日の法雲寺の風景—

法雲寺(市内高岡)は延慶3(1310)年に中国浙江省天目山に留学した復庵宗己が小田治久の招きで文和3(1354)年に開山した禅寺です。復庵は31歳の時に中国(元)に渡り天目山正宗禅寺の中峰明本(普応国師)を師として数年間学んでいます。嘉暦元(1326)年に帰国してからは、小田城近くの高岡に法雲寺の前身となる楊阜庵を設けて北関東を中心に活動しました。

復庵は師の中峰を深く敬慕しており、中峰の足跡をたどって旅をしています。建武2(1335)年、56歳の時に楊阜庵を正受庵と改めて止住していますが、これは中峰が正宗寺を獅子正宗禅寺に改名して止住した時と同じ歳でした。境内の造りからも、法雲寺は獅子正宗禅寺を意識して開山されたものと思われます。U字形に台地(山)を割り貫いて立地する方丈と池などは、獅子正宗禅寺と共通する点です。古刹の雰囲気も現在も色濃く残している法雲寺ですが、当初の伽藍配置を含め全容はまだ分かっていません。しかしながら、明治初期に境内の様子を描いた風景画が残されており、そこから多少なりとも当時の姿を想像することができます。

「法雲寺境内図」は、建長寺(神奈川県鎌倉市)の真浄禅師の下で修行しながら、古名画を模写して技法を学んだ橋本雪蕉(1802~1877)が描いたものです。雪蕉は明治元(1868)年まで江戸で過ごし、明治3年に八戸に移りました。何かの縁でこの2年余りの一時を法雲寺で過ごし、これらの絵を残したものと思われます。絵図は8枚の風景と、境内で見られたであろう四季の植物群1枚が1巻にまとめられています。方丈や池など現在も見られる景色もありますが、中にはどのあたりを描いたものか分からない絵もあります。雪蕉がどのような動機でこの絵を描いたのか分かりませんが、わずかながらも当時を偲ぶよすがの一つとなっています。

(中澤達也)



法雲寺方丈。大きな松が見られます



坐禅をする場所と思われるですが、現在は不明です。



方丈裏にある庭園。池には蓮の葉が見られます。



四季折々の植物(部分)

法雲寺境内図(法雲寺所蔵、当館寄託)

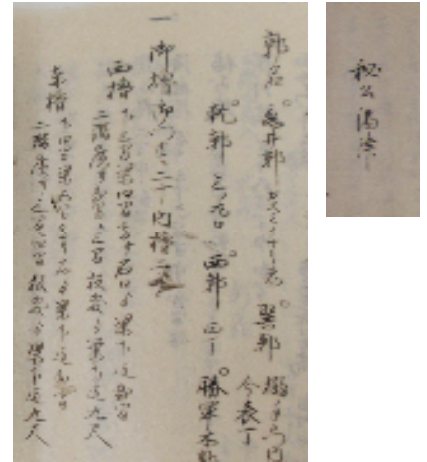
<p>6/15(土)午後2時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。</p>	<p>下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも中世コーナーに展示)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 法雲寺の瓦 ● 梅溪(39世)和尚像 ● 霊戒(40世)和尚像(雪蕉筆) ● 南禅真浄和尚像(雪蕉筆) <p>全て法雲寺所蔵(当館寄託)</p>
---	---



土浦城模型を楽しむ

—後編—

前号に続き、実際の100分の1の土浦城模型のお話です。古文書「秘公満律」には「本丸は坪数1,297坪。二の丸は3,668坪、三の丸979坪」と書かれています。模型を見ても本丸に比べて二の丸がおよそ3倍の広さであることがわかります。外丸を除く土浦城の主要部分は、およそ6千坪(19,800㎡)。博物館に隣接する土浦小学校の敷地面積が14,103㎡、荒川沖小学校は19,990㎡でほぼ同じ広さです。本丸には東西の櫓が、二の丸には武具蔵、楯蔵、糧蔵が、三の丸には焰硝蔵、御城米蔵がありました。模型にはほとんど含まれていませんが、城を囲んで郭と呼ばれる城地があり、武家屋敷として用いられていました。亀井郭、翼郭、多計郭、乾郭、西郭、勝軍木郭の6つがあり、面積の総計は33,948坪(およそ11万2千㎡)、郭を含めた土浦城の面積は約4万坪、東京ドーム2.8個分です。



秘公満律 部分(個人所蔵)

「秘公満律」はその名の通り、本来は秘すべき城の防衛に関わる重要な情報を書き留めています。櫓や城内の門の寸法、橋の種別や長さ、井戸や水門の位置などのほか、本丸の白壁に設置された防衛設備として「大筒狭間 錠 銚口 十四口」「石落口 五ヶ所」と記されています。大筒狭間は大型の火縄銃の銃口を差し出すため白壁につけた窓のことで、模型の白壁にも丸や四角の穴を付けました。石落とは土塁を登って本丸に入ろうとする敵兵を石や矢で迎え撃つために、白壁の下部を開放可能にした仕組みです。この構造は模型に反映させることができませんでしたが、平成19年、石落を亀城公園内の白壁に復元しましたので、実際にご覧になることができます。模型には十数体の人形を配しましたが、これらが動いている姿を想像してみましょう。一年の始め、元旦早朝から藩士らが登城してきます。新年最初に汲んだ若水でたてた大福茶に始まり、掃初、射初、乗初などが行われました。掃初とは一月二日、その年初めて掃除をする行事で、江戸城で老中の一人が箒をもって早く出仕し、將軍の座所を掃き清めた言い伝えに由来するといわれています。射

初、乗初は新年の武芸初めを、また一月七日は講釈初で、典籍の講義初めを祝いました。この他、具足飾、蔵披、現在は七草として知られる人日祝など、「秘公満律」は数多くの行事について、時刻や場所、担当者や着衣について書き留めています。土浦城主土屋家は定府の大名であり、正月に土浦に在城していることはありませんが、土浦城では武家の年中行事が藩士らの手で粛々と行われていました。

(木塚久仁子)



土浦城模型(当館所蔵)

6/8(土)午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも近世コーナーに展示)

- 外丸表奥御殿向惣絵図(文久2年)
- 秘公満律(江戸時代中期)



江戸時代の日記にみる春の行事

—休み日としての天道念仏—

天道念仏という行事をご存知でしょうか。おてんとう様、すなわち太陽に対する民間信仰で、春先の2～3月に太陽を拝みながら五穀豊穡を祈り念仏を唱える年中行事です。茨城・栃木・千葉・福島などに伝承されています。現在の土浦市域ではこの行事をみることはできませんが、市内の小山崎や小岩田などで2月8日におこなわれていました。小山崎では子供の祭りに対する老人の祭りにあたるものだといわれたようです（『土浦市史民俗編』より）。

江戸時代、白鳥村（現市内白鳥町）の名主であった富岡家には、数多くの日記が残されており、日々の出来事や農作業、冠婚葬祭などとともに、いくつかの年中行事が書きとめられています。そのなかで、たとえば文化15（1818）年の日記には2月5日と3月28日の条に「天道念仏休」と記されています。両日を現在の暦（新暦）になおすと、3月11日と5月3日にあたり、この頃の富岡家では苗代づくりや種籾の準備をすすめていました。春の農作業の本格化にあわせて、天候が順調に推移していくように祈願したようです。「休」という記述は農作業を行わない日、村全体の休み日を意味していると思われる。

天道念仏は城下町土浦でも行われていました。土浦城下で醤油醸造業を営んでいた国学者色川三申の日記「家事志」にも天道念仏が登場します。

「明後日天道念仏之由二而ち々蓬参り申候、例之通米壹杯銭十文遣し申候」

（文政10<1827>年2月17日の条）

明後日にあたる2月19日（新暦3月14日）が天道念仏であることを知らせにきた年寄りたちに対して、米を一杯と銭十文を渡したことがわかります。また、土浦城下で私塾を営んでいた沼尻墨僊は、「墨僊漫筆之稿」のなかで天道念仏についてふれています。

「天道念仏花見念仏などの時ハ其前夜ハ定使のもの、あすハあそひますぞと呼あるきたる也、予カ十二三歳の頃迄ハあるなり、是もいつか止たり」

墨僊が12～13歳の天明7（1787）年頃までは天道念仏や花見念仏のときに、定使の者が「明日は遊びの日だ」と歩いて町のなかを触れてまわりました。

ご紹介した断片的な記述からは、土浦で行われた天道念仏の様子を具体的にうかがい知ることはできません。江戸～明治時代に編さんされた地誌『新編常陸国誌』によると、天道念仏とは、村人たちが鎮守や寺の庭で願文を唱えながら鼓を打ち、鉦を鳴らして念仏を唱え、日の出を拝み日暮れまで男女が袖を列ねて周回しながら踊る行事であったようです。場所によっては座ったまま念仏を唱えたところもありました。『江戸名所図会』にある船橋（現千葉県船橋市）の天道念仏の絵は『新編常陸国誌』の記述と関連して見るができるものです。土浦でおこなわれていた天道念仏もこのような様子だったのででしょうか。

（萩谷良太）



江戸名所図会（当館所蔵）

5/25（土）午後2時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近世コーナーに展示）

- 新編常陸国誌
- 江戸名所図会
- 富岡家住宅模型



真鍋小学校校舎の変遷

—西真鍋から真鍋台へ—

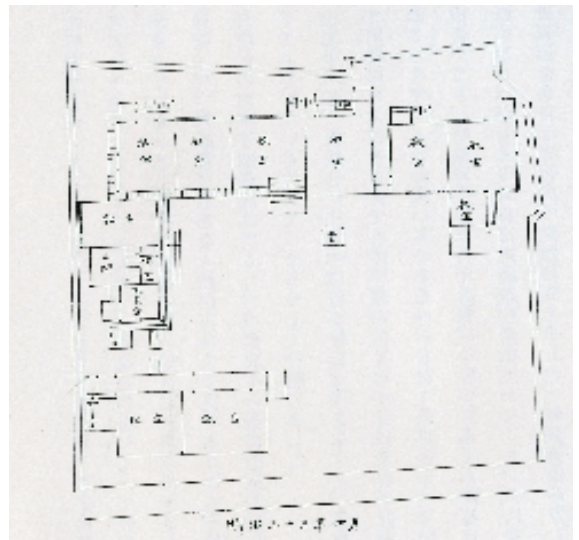
土浦の春の名所のひとつに「真鍋の桜」があります。樹齢百年を超える5本のソメイヨシノが真鍋小学校の校庭の真ん中に咲きそろう姿は見事で、一見の価値があります。

さて現在の小学校は真鍋台の、土浦一高と隣り合う位置にありますが、明治10(1877)年6月の開校当初は西真鍋にありました。^{ちやうしょういん}長松院というお寺の建物を利用し、75名の入学生でスタートしています。当時の学校運営は、地域の寄付金や授業料に頼るもので、校舎の新築は優先されませんでした。木造茅葺^{かやぶき}平屋建ての教室は昼間でも薄暗く、雨が降る日は字もよく見えないほどだったと当時の卒業生は『創立百周年記念誌なでしこ』に記しています。

小学校ができる前、多くの真鍋村周辺の子どもたちは、土浦町の小学校(現土浦小学校)に越境入学していました。土浦町側では、真鍋村や^{とのさと}殿里村に学校運営のための寄付金を要請したり、授業料を一律高めの30銭に設定するなど対応に苦慮していたようです。このような中で真鍋小学校が創立され、児童の増加に合わせ、敷地の拡張や校舎の増築をかさねていきました。

当館で所蔵している校舎の変遷図には、明治10年6月、同12年4月、同25年11月、同33年4月、同40年2月の5図があります。見比べると、明治10年から12年にまず敷地が拡がり校舎も増築されました。さらに高等科が併設され真鍋尋常高等小学校となり、児童が298名に増加した明治25年には教室は8つに増えました。また、明治33年は公立尋常高等小学校の授業料と試業(進級試験)が廃止になり就学率がより向上した時期のため、建物が1棟増築されたことで校庭が一段と狭くなってしまっています。

明治38年にひとつの転機が訪れます。真鍋台に西洋風ゴシック建築の土浦中学校(現土浦一高)の校舎が完成すると、これに刺激され町内から中学校に隣接した場所に校舎を建設しようという声があがったのです。明治40年2月、現在地に新しい校舎は完成しました。ガラス張りの明るい教室と広い運動場は好評を得たといえます。工事責任者は土浦中学校と同じ塚越斧太郎でした。新築移転後に植えられた桜の苗木が「真鍋の桜」です。桜は西真鍋から真鍋台へ移り、あらたな歴史を刻んできた真鍋小学校の象徴でもあります。(野田礼子)



参考文献『創立百周年記念誌なでしこ』(土浦市立真鍋小学校創立百周年記念事業実行委員会 昭和52年発行)

真鍋小学校校舎変遷図(明治33年部分)『創立百周年記念誌なでしこ』より転載 ※原資料は当館所蔵

6/1(土)午後2時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも近代コーナーに展示)

- 学校成功日限御請書(明治時代)
- 観桜会写真(昭和初期)



市史編さんだより

いち 市の賑わいにみる先人の知恵—『中城町御用日記』から— なかじょうまち ごようにつき

今からおよそ400年前、慶長8（1603）年に江戸幕府が開かれ、翌年には幕府の直轄工事により水戸街道が開通しました。その10年後の慶長18（1613）年9月には、土浦三橋といわれるぜにがめぼし すのこぼし さくらがわぼし錢亀橋・箕子橋・桜川橋（現在の桜川橋とは別）が架設され、より完全な形になりました。それと共に人々の往来も活発になり、交通量の増加に伴い農業を生業としていた中城町も宿場町としての性格を強め、土浦城下の代表的な町人町として発展しつつありました。江戸幕府も安定期に入り、元禄文化が花開いた元禄16（1703）年正月から正徳2（1712）年10月までの間、町役人が提出した公文書等を書き留めたものが「中城町御用日記」として伝えられています。

当時は桐生・八王子などの絹商人が土浦に姿を見せるなど、各地の行商人達が入り込み、それぞれの商品を並べる市が盛んに開かれるようになり、ろくさいいち六斎市なども開かれていました。元禄17年3月の日記にはこう記されています。

「御当地六才之市日二而売買仕候木綿、尺幅不同二御座候故着類等二も成兼申候二付、他所より買商人共不参候而…当地売買之木綿尺幅御定被為遊、判附之儀私共二被仰付…連々諸国之商人共参買申候ハ、木綿之直段も能売申候へ而、別而町賑二も可罷成奉存候…」

木綿の丈尺が揃わないので尺幅を決め、規格品を検印付きで売買したら需要も高まり、近隣から買い手も集まり、町も賑わい繁盛するのではないかと町人達の思いから、検印付木綿売買を藩に願い出ています。その願いは聞き届けられ、以後検印付きで売買されたようです。

一方、例年3月中旬に中城町にある天満宮境内で開かれる馬市は、とりわけ盛大なものでした。

宝永2（1705）年3月12日～3月16日	惣馬数456疋	売馬数374疋	代金731両 <small>びん</small> 鑓100文
同 3（1706）年3月10日～3月16日	惣馬数496疋	売馬数421疋	代金839両1分
同 4（1707）年（開催日は記載無）	惣馬数552疋	売馬数500疋	代金1,017両2分1貫68文
同 5（1708）年3月11日～3月16日	惣馬数679疋	売馬数528疋	代金1,111両223文
同 8（1711）年3月10日～3月15日	惣馬数（記載無）	売馬数767疋	代金1,668両3分

このように日記に記載されており、年々盛況になっていった様子を読み取れます。土浦は脇街道でありながら、本街道の馬市（例えば、歌川広重の「東海道五十三次」に描かれている「ちりゅう池鯉鮒 しげか首夏馬市」では約500疋が取引されていたという）にも劣らない数の馬が売買されていました。多い時では767疋の馬が取引され、1,668両のお金が動いていたのには驚くばかりです。この当時、馬は武家用馬・農耕馬・伝馬として非常に重要視されておりました。近くに稲敷台地など良い牧場があったこともあり、藩から領民に駒金を貸し渡し、馬の養育に力を入れ、みょうがきん冥加金を取るなど藩を挙げて奨励につとめたことが盛況に繋がったものと思われます。このように馬市での藩の奨励や、六斎市での町人達の知恵も相まって、大市（東崎町の鷲神社境内で開催）に加え享保11（1726）年には新大市として、真鍋市や錢亀市なども始まり、現在の土浦の礎が築かれてきました。

このような歴史ある城下町土浦を、風薫る一日『中城町御用日記』（平成25年3月刊行）を片手に、名主の*善兵衛さんと共に、在りし日の賑わいに想いを馳せながら、そぞろ漫ろ歩きを楽しんでみては…。

※解説を進めていく中、毎日のように名が記されている中城町名主の入江善兵衛は「名主の善兵衛さん」として非常に親しみを覚えました。藩と町民のパイプ役として町に尽力した人物で、東崎町名主の太田甚五兵衛と共に、時代を駆け抜けていった一人といえます。

（市史編さん係非常勤職員 山崎純子）

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、土浦市立図書館職員の中嶋宣江さんに寄稿いただきました。

「博物館と共に、地域に根差して」

博物館と図書館は、教育や文化の発展のため、資料収集を始めとし、教養・調査研究・レクリエーションに役立つ事業や講演会の開催等、共通した活動に取り組む施設です。

これまでの土浦市立図書館と土浦市立博物館の連携・協力の分野は、郷土資料の情報提供や資料貸借等の極めて限定的なものでした。最近では、「夏休み子ども講座」や「図書館まつり」で学芸員の方々に講師を務めて頂いたり、特別展開催に合わせて図書館内に資料展示を行う等の取組みを実施し、利用者の方の好評を得ています。

現在、全国的な図書館の動きとして、これまでの資料の貸出に加えて、市民の仕事や生活上の課題解決支援が活発です。例えば、高齢化社会や自己責任の時代を反映して、健康・医療情報や、起業・就労情報を提供する図書館も見られます。また、地域の課題解決支援のため、地域産業やまちづくりに関する情報収集・提供のほか、関連セミナー開催、地域資料のデジタルアーカイブ化等も実施されています。

土浦市立図書館では、新図書館の開館に向け、課題解決支援を含め、段階的なサービスの拡充を計画しています。なかでも、地域の課題解決支援は、最も重要な使命と言えるでしょう。その達成のため、図書館は、地域の姿をよく知り、伝える、博物館の活動に倣う点も多いはずですが、また、図書館が主体的・計画的に取り組むことはもちろんですが、博物館等の各機関との連携も、とても重要です。例えば、デジタルアーカイブ等の新たな取組については、博物館と図書館の緊密な連携のもとでの検討も一つの方策ではないでしょうか。地域の文化・情報の宝庫である博物館は、図書館にとっても心強い味方です。博物館と共に、図書館も地域に根を張り、市民生活に無くてはならない存在となれるよう、活動を深めていければと思います。（土浦市立図書館 中嶋宣江）

コラム(23)—資料保存の背景—

日本の近現代資料に、昭和2(1927)年、友好親善のため米国から小学校や幼稚園に贈られてきた「青い目の人形」があります。当時、全国の学校で盛大な歓迎会が催されましたが、送られてきた1万2千体余りの内、今確認されるのは2～3百体ほどです。十数年後の太平洋戦争さなか、人形は鬼畜米英の標的として学校で焼かれたり壊されたりしたのがその一因とも言われています。一方当館が行った茨城県内の調査で、歓迎式典を見聞きした元小学校教員は、太平洋戦争開戦時、学校ではすでに「青い目の人形」の存在すら認識されていなかったと証言しています。

人形は戦後再び見出されます。やはり茨城県内の事例で、小学校の用務員さんが、学校で捨てられそうになった人形を家にもちかえり、子供のおもちゃ代わりに使っていたのを保存していたのです。日米友好の懸け橋として大歓迎され、もてはやされた「青い目の人形」は、まもなく忘れ去られたようです。戦後の校舎建て替えの頃、人形は再び校舎の片隅から見出され、古い教材と一緒に処分されようとしていたのです。

侵略戦争に突き進んだ近代日本、その国際感覚や公教育の環境が、人形保存の背景に見え隠れします。（塩谷 修）

情報ライブラリー更新状況

【2013・5・14現在の登録数】

古写真	507点(+5)
絵葉書	414点(+5)

※()内は2012年12月11日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞(かすみ) 2013年度
 春季展示室だより(通巻第23号)
 編集・発行 土浦市立博物館
 茨城県土浦市中央1-15-18
 TEL 029-824-2928
 FAX 029-824-9423
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>
 1～6ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

次回夏季展示は、2013年7月2日(火)～9月25日(水)となります。「霞」2013年度夏季展示室だより(通巻第24号)は7月2日(火)発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。

※展示室だより「霞」は当館ホームページからもご覧になれます(カラー)